

熊本大学 脳神経内科

キャリア形成・専門医養成 特別プログラム

2027



ご挨拶

熊本大学大学院生命科学研究部 脳神経内科学講座
教授 植田 光晴

熊本大学 脳神経内科 キャリア形成・専門医養成特別プログラムをご覧いただき、心よりお礼申し上げます。

超高齢化社会の到来とともに、脳卒中・認知症・パーキンソン病をはじめとする神経疾患は増加の一途をたどり、脳神経内科に期待される役割はますます大きくなっています。加えて、核酸医薬や分子標的薬、脳血管内治療など、新たな治療法が次々と臨床応用され、この領域は今まさに大きく発展しています。幸いにも熊本大学脳神経内科には、長い歴史と実績を基盤に、高い専門性と幅広い診療を実践するメンバーが揃っています。非常に充実した教育病院群を有していることも、私たちが提供できる最大の財産です。急性期から慢性期、コモンディーズから希少難病まで、温かい指導者の下で安心して研鑽を積むことができます。

医師として生きていく時間は、想像以上に長いものです。だからこそ、若いうちに確かな専門性を身につけることが、長いキャリアを支える力になります。脳神経内科医が最も誇れるもの、それは知識と技術に基づいた正確な診断スキルです。スペシャリストを目指す先生方はもちろん、総合診療やプライマリケアを高いレベルで実践したいジェネラリストの先生方にとっても、神経診察の習得は生涯にわたる大きな武器になります。

脳神経内科の魅力は、働き方の多様さにもあります。救急診療を中心とした働き方、難病診療やリハビリテーションを中心とした働き方、基礎研究や臨床研究を中心とした働き方、急性期から慢性期まで、忙しい現場からじっくり向き合う診療まで、幅広い選択肢があります。当教室では、こうした多様なキャリアパスに対応した研修プログラムを準備しています。それぞれのペースで、自分に合った道を見つけていただける環境です。

これからの時代、「皆と一緒に」「これまで通り」は通用しません。自分の得意分野を持ち、社会に必要とされ続ける医師であるために、脳神経内科は最適なフィールドだと考えます。治療の選択肢が広がり、研究すべき重要な課題も数多く残されている今こそ、脳神経内科医の活躍の場はさらに広がっています。

熊本大学脳神経内科は、共に歩んでくれる先生方が安心して研鑽を積み、充実した医師人生を送れるよう全力でサポートします。ぜひ、私たちの仲間に加わっていただけることを心より願っております。



「脳神経内科」のニーズと魅力

-多様なキャリアパスと将来性-

脳神経内科は、内科医としてのジェネラリストの視点と臨床神経学のスペシャリストとしての専門性を併せ持つ診療科です。患者さんの「何気ない一言」やわずかな身体的変化から診断へと導く、高度な診断能力が身に付くことも脳神経内科の魅力の一つです。また、最新の治療法を通じて、これまで治療が困難とされていた疾患に対しても大きな進歩を遂げており、今後も患者さんのQOLの向上や予後の改善がさらに進むことが期待されます。診療領域が多岐にわたるため、多様な働き方やキャリアパスに柔軟に対応できる点も、大きな魅力と言えます。

◆高い社会的ニーズ

頭痛、めまい、しびれ、もの忘れなどを主症状とする脳神経疾患は、日常生活機能や生命予後に大きく影響します。また、高齢化社会では脳卒中や認知症、パーキンソン病などの神経疾患が増加するため、脳神経内科医のニーズはこれまで以上に高まっています。

◆広範な診療領域と多様なキャリアパス

脳神経内科は、急性期脳梗塞に対するインターベンション、神経免疫疾患に対する分子標的治療、神経変性疾患に対する核酸医薬など、先進的な治療法が著しく発展している分野です。根治が難しい病態においても、患者さんに寄り添ったケアやマネジメント、さらにはリハビリテーションなど多角的なアプローチを実践しています。また、ジェネラリストとして全身管理を行うことにより、患者さんの日常生活機能や生命予後の改善を目指しています。これら多様な診療領域の中で、自身の関心分野や個々のワークライフバランスに最適な環境を選び、活躍することが可能です。将来的に地域の中核病院での活躍を目指すこともできれば、自らの興味をさらに掘り下げ、本格的な基礎研究や臨床研究の道に進むことも可能であり、多様なキャリア志向に対応しています。



◆家庭とキャリアの両立

脳神経内科で身につく高度な専門知識と診察技術は、医師として一生の強みとなります。そのため、産休や育休を経ても円滑に復職でき、家庭と仕事を両立しながら専門性を磨き続けることで、着実なキャリアアップが可能となります。実際に男女ともに脳神経内科医は全国的に増加傾向にあり、熊本においても同様です。

◆研究の将来性と治療法の開発

かつて脳神経内科領域は、「診断は可能であっても有効な治療法が存在しない」とされてきました。しかし、近年の研究の進展により、この状況は大きく変わりつつあります。遺伝子治療、分子標的薬、抗体治療など、これまでの治療体系を超えた新たなアプローチが開発され、既に臨床応用が始まっています。基礎研究と臨床研究の連携が進む中で、診断技術や治療法のさらなる高度化が期待されており、今後も医療の現場に革新をもたらすことが予想されます。このような変遷の中で、当該分野の知識と理解を深めることは、極めて重要な意義を持つものと考えられます。

「熊本大学 脳神経内科」だからできること

-豊富な臨床経験と多様性のある医局-

熊本大学 脳神経内科は、豊富な臨床経験が積み、協力体制もしっかりしています。また多様な背景の先生が入局し、それぞれのフィールドで活躍しています。ぜひ熊本大学 脳神経内科に入局し、共に新たな医療の可能性を切り拓いていきましょう。

◆各領域のスペシャリストとの連携と知識の吸収

熊本大学 脳神経内科には、ナンバー内科時代からの長い歴史を有し、脳卒中、神経変性疾患、神経免疫疾患、機能的疾患など、幅広い領域のスペシャリストが集結しています。これまでアミロイドーシス診療と研究で世界を牽引し、脳血管障害に対する内科的アプローチでも革新的な実績を積み重ねてきました。今では、多彩なサブスペシャリティを持つ医師が集まり、互いに切磋琢磨できる恵まれた環境であると自負しています。自らの専門性を高め、未来の神経内科医療を切り拓きたい方にとって最適な環境です。

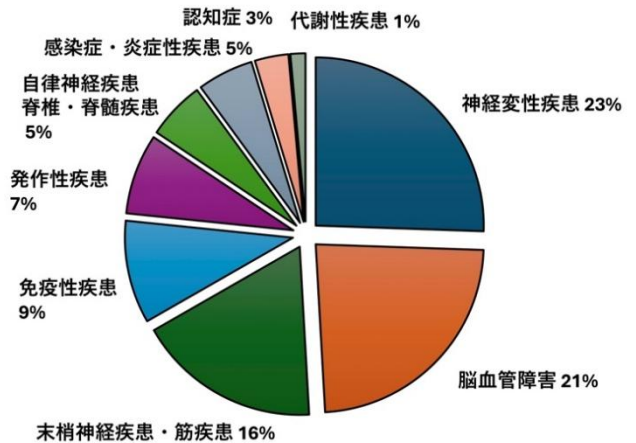
◆豊富な臨床経験と協力体制

熊本大学 脳神経内科は、一般病床 31 床、SCU（脳卒中ケアユニット）3 床を有し、年間 600 人を超える多様な患者さんを受け入れています。国立大学病院の脳神経内科としては、全国でもトップクラスの病床数・入院患者数を誇り、豊富な臨床経験を積むことができます。

当科ではチーム診療制を導入し、患者一人ひとりに対して質の高い医療を提供するとともに、病欠や学会出張などにも柔軟に対応できる働きやすい環境を整えています。産休・育休制度も充実しており、ライフワークバランスを保ちながらキャリア形成が可能です。また、医療専用コミュニケーションアプリ「Join」を活用し、緊急時にはリアルタイムで上級医と連携できる体制を整えています。このように、安全かつ効果的な医療を提供しながら、専門医として成長できる環境が当科の魅力です。

実際に、令和 5 年度は 6 名、令和 6 年度は 4 名、令和 7 年度は 10 名の先生方が新たに入局しています。

2024年 入院患者数: 628名



◆多彩な経歴と多様なキャリアパス

熊本大学 脳神経内科では、熊本県内の関連病院との連携が強固で、地域医療と連携した研修体制が確立されています。また、修学資金貸与（地域枠）医師や自治医大卒医師、他の分野で修練を積んだ医師など多様な先生が多数入局し活躍している実績があります。国内外への留学実績も豊富で、志向に応じたキャリアアップが可能です。臨床の現場で経験を積んだ後、基礎研究や学術活動に専念する

道、あるいは他分野から転向して新たな視点を取り入れるなど、個々の目標に合わせた多様なキャリアパスを用意しています。また安心して活躍できるように収入面にも配慮し、柔軟な調整を行なっています。

入局 1年目 2年目 3年目 4年目 5年目 6年目以降

内科
専門医
試験

神経内科
専門医
試験

一般脳神経内科
コース

脳卒中修練
コース

リハビリテー
ション修練
コース

神経科学研究
コース

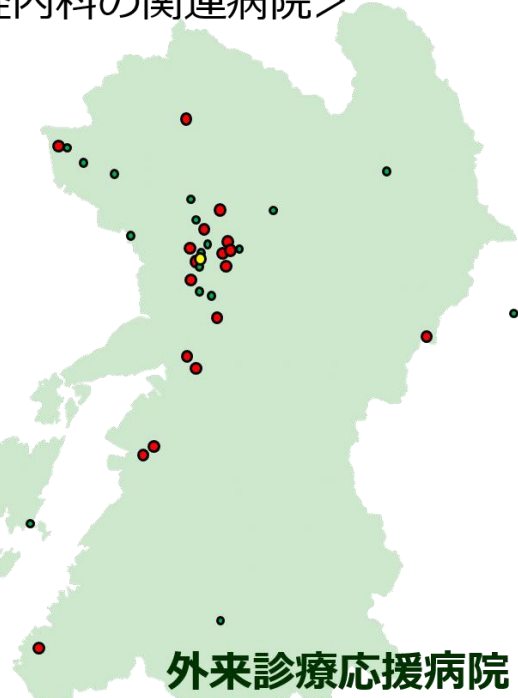
コース	研修施設	希望に応じて
一般脳神経内科コース	急性期病院 難病拠点病院 地域中核病院	国内留学 大学院・社会人大学院
脳卒中修練コース	急性期病院 地域中核病院	国内留学 社会人大学院
リハビリテーション修練コース	急性期病院 難病拠点病院 地域中核病院	リハビリテーション病院など 国内留学・社会人大学院
神経科学研究コース	急性期病院 難病拠点病院 地域中核病院	大学院 大病院

熊本県全域の魅力的な教育病院群

熊本大学 脳神経内科と関連病院では、急性期から慢性期、コモンディーズから希少難病まで、非常にバランス良く脳神経内科疾患の診療を学ぶことができます。充実した脳卒中急性期病院、神経難病拠点病院リハビリテーション専門施設、地域拠点病院など、国内でも有数の教育病院群で脳神経内科専門医取得をサポートします。幅広い脳神経内科診療を高いレベルで実践することが出来る真の実力が身につきます。

<熊本大学脳神経内科の関連病院>

- 熊本大学病院
- 脳神経内科 関連病院
- 外来診療応援病院など



関連病院

- 済生会熊本病院
- 熊本赤十字病院
- 熊本医療センター
- 熊本市民病院
- 熊本再春医療センター
- 熊本南病院
- くまもと南部広域病院
- 有明医療センター
- 熊本労災病院
- 熊本総合病院
- 水俣市立総合医療センター
- そよう病院
- 熊本機能病院
- 熊本託麻台リハビリテーション病院
- 西日本病院
- 山鹿中央病院
- 宇城総合病院
- 杉村病院
- 阿蘇医療センター
- 北部病院

外来診療応援病院

- 熊本地域医療センター
- 西村内科・脳神経外科病院
- 熊本回生会病院
- 桜十字病院
- 新生翠病院
- くまもと県北病院
- にしくまもと病院
- 菊池都市医師会立病院
- 天草地域医療センター
- 天草第一病院
- 長野内科小児科医院
- 山田クリニック
- 大牟田天領病院
- 高千穂町国民健康保険病院

熊本大学病院



熊本医療センター



熊本赤十字病院



済生会熊本病院



熊本市民病院



熊本再春医療センター



熊本機能病院



◆安定した勤務環境, 恵まれた生活環境

熊本大学 脳神経内科の関連病院は全て熊本県内の医療機関です。常勤スタッフとしての安定した勤務環境が保証されます。休日は、森と水の都 熊本、阿蘇、天草など恵まれた環境でリフレッシュできます。

◆将来性, 幅広い選択肢, サポート体制

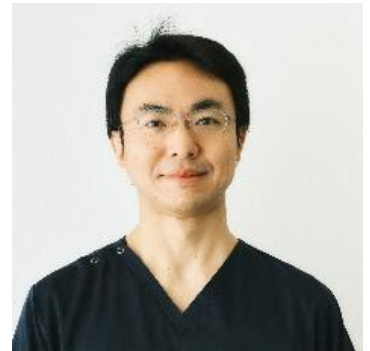
脳神経疾患の診療は将来的にますます重要になります。脳卒中などの急性期から神経難病、リハビリテーションなど幅広い領域をカバーします。志向する専門性の研鑽、専門医取得、留学などもサポートします。

熊本で活躍する脳神経内科医のご紹介

永沼 雅基 (平成 12 年熊本大学卒、済生会熊本病院)

これまでの経歴と現在取り組んでいること

私は熊本大学卒業後、現在の研修制度とは異なりますが、大学病院、熊本市市民病院、済生会熊本病院で初期研修およびレジデント研修を行いました。その後、国立循環器病研究センターに国内留学する機会を得て、脳卒中診療の実際と臨床研究の進め方を学びました。帰任後は地域の救急病院で、脳卒中を中心とした神経救急診療に携わっています。また、日々の診療で生まれる疑問を形にしたいと考え、2021年に社会人大学院へ進学し、2025年に学位を取得しました。現在は、救急の最前線で脳卒中診療に取り組む一方、済生会熊本病院のPET設備を活かして、外来でアルツハイマー病に対する抗Aβ抗体薬治療にも取り組んでいます。



脳神経内科を志望して思うこと

脳神経内科の魅力は、診察から病態を考え、診断へ結びつけていく知的なおもしろさにあります。神経診察を通して病変部位や病態を推定する過程は非常に奥深く、学べば学ぶほど面白さが増していきます。学ぶことが膨大で大変ですが、神経内科を志望してよかったと思います。

将来の目標

今後も脳卒中診療をしっかり担いながら、認知症領域では新しい治療を地域医療の中で適切に届けられる医師でありたいと考えています。臨床と研究を両輪として、患者さんにより良い医療を提供していきたいと思っています。

プログラムを検討中の先生への一言

脳神経内科は、診断学の面白さ、救急医療のダイナミズム、そして患者さんを長く支える医療のやりがいをおわせ持つ診療科です。高齢化が進むこれからの時代、脳卒中、認知症、神経変性疾患などに対応できる脳神経内科医の役割はますます大きくなります。神経診察を武器に、救急から外来、最新治療、研究まで幅広く挑戦できるこの分野には、他にはない魅力があります。少しでも興味がある方は、ぜひ脳神経内科の門をたたいてみてください。きっと、自分の成長と医療のやりがいを実感できるはずです。

石崎 雅俊 (平成 13 年熊本大学卒、熊本再春医療センター)

これまでの経歴と現在取り組んでいること

平成 13 年に熊本大学脳神経内科入局後、熊本医療センター、済生会熊本病院、国立宮崎病院、熊本大学集中治療部、熊本労災病院に勤務し急性期医療と地域医療について経験しました。その後、熊本大学脳神経内科大学院で「筋ジストロフィーモデルマウスを用いた治療研究」を行いました。研究で培ったことを患者さんに還元したいと考え、その後は熊本再春医療センターに勤務させていただいております。現在は筋ジストロフィー、ALS、パーキンソン病、認知症患者さんの診療を行う毎日です。また筋ジストロフィー研究班では「筋ジストロフィー介護者の健康管理」をテーマとし、患者さんだけでなく家族・介護者のQOL向上を目指しております。



脳神経内科を志望して思うこと

入局前は別の科と迷っていましたが、「熊本大学脳神経内科のアットホームな雰囲気」「脳神経の未知な部分のワクワク感」に惹かれ入局を決めました。脳神経内科は治療開発が目覚ましい領域ですが、未だ治療が確立していない部分も少なくありません。そのような中、症状緩和や生活支援により患者さんの人生に関わることの大切さを日々実感しております。入局後 20 年経過した今でも、問診と神経診察の重要性は色褪せず、ライフステージが変わる度に疾患や患者さんの見え方が変化していくことも大きな魅力と感じています。

将来の目標

神経難病診療について若手医師やコメディカルに興味を持ってもらい、次世代につながる領域としたいです。個人としては神経難病だけでなく、一般内科や神経救急にも幅広く対応できるように知識や技術を今後も深めていきたいです。

プログラムを検討中の先生への一言

脳神経内科は、急性期から慢性期まで幅広く経験でき、年齢を重ねるごとに自身の成長が深まっていきます。ライフスタイルに合わせた働き方もしやすく、迷っている方こそおすすめの分野です。きっと自分なりのやりがいが見つかると思います。

三隅 洋平（平成 14 年熊本大学卒、熊本大学）

これまでの経歴と現在取り組んでいること

卒業後の研修期間は熊本大学病院脳神経内科、熊本医療センター、熊本市市民病院で、脳神経内科を中心に内科全般、救急医療を学びました。その後、大牟田天領病院で 2 年間勤務し、脳神経内科全般の研鑽を積んだ後に大学院に進学しました。その後、ポルトガルに留学を経て、2013 年以降は熊本大学脳神経内科の教員を務めています。

研究領域ではアミロドーンを中心に取り組み、診療は脳神経内科全般を担当しています。また、原因不明の希少・難病患者の診断を確定させるためのプロジェクト（IRUD）の熊本大学事務局を務めております。



脳神経内科を志望して思うこと

学生時代に神経内科の諸先輩の素晴らしい診療を見て感動したのがきっかけで進路を決めました。以後、20 年以上診療に携わっていますが、問診、神経診察から診断・治療を導く一連の診療そのものがいつも新鮮で、診療領域として興味が尽きません。また、日々治療法が発展している疾患から、現在でも病因が未解明の疾患、治療法が未確立の疾患など、未開拓の分野、これから挑戦すべき活躍の場が多く残されていることも魅力です。さらに、神経疾患にはコモンディジーズも多い一方で、希少で高い専門性を求められる疾患もあり、非常にやりがいを感じています。

将来の目標

脳神経内科医として、日々の診療に興味と情熱を持ち続けたいと思います。また、研究者として新しいことを生み出し、医学の発展に寄与できる仕事ができればと願っております。

プログラムを検討中の先生への一言

長い医師としてのキャリアですので、「自分が本当にやりたい」と思える診療科を選んでほしいと願います。脳神経内科には素晴らしい先輩の先生方が多く、興味を持った領域で研鑽を積み、優れた医師・研究者としての

キャリアを築くことができます。

高松 孝太郎（平成 15 年熊本大学卒、熊本医療センター）

脳神経内科という選択肢

私は平成 15 年に熊本大学医学部を卒業し、神経内科に直接入局しました。当時は現在のような臨床研修制度がなく、「脳に興味がある」というシンプルな理由で脳神経内科を選びました。振り返ると、必ずしも明確な将来像を持っていたわけではありませんが、結果として非常に多様でやりがいのあるキャリアを歩むことができます。入局後は、大学病院、市中病院、救急病院など複数の医療機関で臨床経験を積み、7 年目に大学院へ進学しました。大学院では神経免疫学教室に所属し、iPS 細胞を用いたアルツハイマー病治療の研究に取り組みました。研究は決して順調ではありませんでしたが、試行錯誤を重ね、6 年間で博士号を取得しました。この経験は、現在の臨床や後進の指導に大きく役立っています。その後は大学病院で、神経難病の診断・治療を地域に普及させる診療体制構築事業にも携わりました。現在は救急病院で、脳梗塞、てんかんなどの**神経救急疾患を中心とした日常診療**を行っています。



脳神経内科の魅力とは

脳神経内科は、**頭痛・めまい・しびれ・意識障害**といった、日常診療や救急現場で頻繁に遭遇する症状から、神経難病、最先端の研究領域までを幅広く扱う診療科です。高次脳機能障害や自律神経症状など、症状の多彩さも大きな特徴です。「神経内科は難しい」「治らない病気が多い」というイメージを持たれがちですが、実際にはこの 20 年で病態が解明され、治療可能となった疾患が数多くあります。片頭痛に対する抗 CGRP 製剤、重症筋無力症や多発性硬化症に対する新規免疫療法など、**神経疾患は今まさに進化している分野**です。また、神経診察は患者さんの話を丁寧に聞き、診察所見を積み重ねて診断に至る「医師の技術」が色濃く反映される分野であり、AI に取って代わられにくい重要なスキルです。

若い先生方に伝えたいこと

市中の救急病院で勤務していると、神経難病よりも、**治療により改善する神経救急疾患**を数多く経験します。若い先生方には、まず「治る神経疾患」を実際に診療し、神経内科に対する苦手意識を払拭してほしいと考えています。一方で、脳神経内科は未解明の領域も多く、研究の機会が非常に豊富です。臨床・研究・教育のいずれに進んでも、社会に必要とされ続ける専門性を身につけることができます。将来的には、救急、専門外来、研究、在宅医療、リハビリテーションなど、**多様なキャリアパス**を描ける点も大きな魅力です。

最後に

医学生や初期研修医の皆さんは、数多くの診療科を前に悩む時期だと思います。脳神経内科は守備範囲が広く、必ず自分の興味や得意分野が見つかる診療科です。

まずは、身近な脳神経内科医に気軽に声をかけ、実際の現場を見てみてください。その一歩が、将来の進路を大きく広げるきっかけになるかもしれません。

井上 泰輝 (平成 16 年熊本大学卒、メイヨークリニック脳神経科学部門)



これまでの経歴と現在取り組んでいること

大学病院や関連病院で神経疾患の診療を経験する中で、「この症状はなぜ起きているのだろう」と考えることが増え、病気の仕組みをもっと深く理解したいと思うようになりました。そこから研究に興味を持ち、現在は神経疾患の病態解明に取り組んでいます。異なる専門やバックグラウンドを持つ研究者と、時には州や分野をも越えて議論を重ねながら研究を進める中で、自分では思いつかなかった視点に出会える面白さを感じています。臨床で感じた疑問を研究で掘り下げ、その成果をどのように臨床へ還元できるのかを考える、そうした循環の中で、日々学びを積み重ねています。

脳神経内科を志望して思うこと

問診や診察から病気の場所や原因を推測してゆく、とても奥深い分野です。最近は抗体医薬や分子標的治療など新しい治療法も目覚ましい発展を遂げ、診断するだけでなく、治療へとつなげることのできる分野になってきたことを実感しています。

将来の目標

神経疾患の病態解明や治療開発に貢献する人間でありたいと考えています。自分自身が研究の面白さに魅了され、夢中になってきた経験があるからこそ、その感動や探究する喜びを大切にしながら研究に取り組んでいます。かつての自分に語りかけるような気持ちで、一人ひとりと向き合いながら、ともに学び、考える指導を行っています。

プログラムを検討中の先生へ一言

幅広い症例を経験しながら、実践的に臨床推論を学ぶことができます。さらに、臨床と研究の両方に触れられる環境の中で、「なぜ？」を大切にしながら考える力も自然と身につきます。臨床をしっかり学び、その先の成長につなげていきたい皆さんにとって、とても魅力的な環境です。

本多 由美 (平成 21 年山口大学卒、熊本大学)

これまでの経歴と現在取り組んでいること

山口大学卒業後、大分県立病院で初期研修を行い、実家（南阿蘇村）に近い熊本大学に入局しました。入局後は済生会熊本病院、熊本再春医療センター、大牟田天領病院、有明医療センターなどで勤務してきました。脳卒中、救急から神経難病、地域医療と様々な分野を経て、いずれの病院でも脳神経内科のニーズの高さを実感致しました。将来何か役にたつかもしれないと認知症専門医を取得、そのことがきっかけとなり、現在大学病院で基幹型認知症疾患医療センターの業務にもたずさわっております。抗アミロイドβ抗体薬の登場により認知症診療も変わりつつある中で、熊本らしい診療ネットワークを構築すべく、他の科の先生方や他の職種、地域の方と連携しながらがんばっています。

脳神経内科を志望して思うこと

久しぶりに大学病院に戻ると、診断できる疾患も検査の種類も治療法も格段に増え、この領域の医学のめざましい進歩を実感しています。今後は抗アミロイドβ薬だけでなく脳内に蓄積する他の蛋白も除去できる時代に入ってくるのかもしれない。その分日々知識のアップデートが大変ですが、治らない病気が治る病気へとかわっていく時代の中で働けることはとても面白いです。

将来の目標

私自身は難病医療をライフワークにしたいと思っています。学生の頃、ある先生が「点としてではなく、線として患者さんに長く寄り添っていく科が神経内科です」とおっしゃっていたのが印象に残っています。治らない病気の方をどう診ていくか、自分の中にちょっとしたティップスやオプションを増やしていくことで、どうすればより良く患者さんが生き抜いていけるか、一緒に考え続けていきたいと思っています。

プログラムを検討中の先生へ一言

疾患も幅広く、症状も一様ではなく、大変と思われるかもしれませんが、ニーズもやりがいも間違いなくあります。医局には様々な分野を専門とする色々な先生がいて、それぞれの形、ペースで働いています。尊敬できる仲間です。各関連病院との連携がスムーズなものこの医局の特徴だと思います。また、家庭との両立に悩まれる方もいると思いますが、勤務形態などフレキシブルに相談しやすい環境です。私自身在宅介護をしておりましたが、色々ご配慮いただき、とても心強かったです。皆さんと一緒に働ける日を心から楽しみにしております。

津川 貴博 (令和3年長崎大学卒、熊本市民病院)

これまでの経歴と現在取り組んでいること

長崎大学を卒業後、国立病院機構熊本医療センターで初期研修を終え、令和5年に熊本大学脳神経内科に入局しました。学生時代から脳神経領域には興味がありました。初期研修で研鑽を積む中で、入局する科について迷っていましたが、generalistであり専門家としても修練を積むことを自分の目標とする職業キャリアとして脳神経内科（特に血管内治療）を選択しました。後期研修は専門を学ぶために2年間は熊本大学、半年ごとに熊本医療センターと熊本市民病院に勤務し、豊富な症例を経験させていただきました。令和8年度からは血管内治療を学ぶため熊本赤十字病院に勤務しております。



脳神経内科を志望して思うこと

患者は多様な主訴で病院を受診します。しかし多くは非医療従事者であり、「しびれ」を代表として脱力なのか、感覚低下なのか、ビリビリ感なのか多様な表現を内包して訴えられます。また急性経過なのか亜急性経過なのか慢性経過なのか、病状経過を詳細な問診から鑑別を挙げ、神経診察で責任病巣を特定し鑑別を絞り、検査を行い、そこから総合的に考え診断に近づいていきます。臨床推論の思考プロセスを駆使するため日々研鑽されていきます。疾患も脳梗塞、頭痛、てんかん、認知症など common な疾患から、希少疾患まで多彩で、興味が尽きない科だと思います。

将来の目標

現在は血管内治療に興味がありますが、General Neurologist を目指した理由は、なかなか診断がつかない様な患者様にもきちんとした診断をつけられるようになり、その方へ最大限可能な治療を行いたいという思いから選択しました。多様な疾患がある中でも脳神経内科は特に多くの主訴を扱います。この先生で良かったと言っていただけの医師を目指しております。

プログラムを検討中の先生へ一言

脳神経内科は難しいと敬遠されることもありますが、日々の診療でどんどん成長していきます。少しでも考えていければ是非お声掛けください。



病院見学・お問合せ窓口

熊本大学 脳神経内科キャリア形成・専門医養成特別プログラムについてご興味のある方、ご質問、見学のご希望などお気軽にご連絡ください。

熊本大学 脳神経内科学講座 三隅洋平（医局長）
Tel: 096-373-5893
E-mail: misumiy1@kuh.kumamoto-u.ac.jp



熊本大学大学院生命科学研究部
先端生命医療科学部門
脳・神経科学分野 脳神経内科学講座

〒860-8556

熊本市中央区本荘1丁目1番1号

TEL 096-373-5893（代表）

FAX 096-373-5895